

原典：『万病回春』（龔廷賢） 血崩門

処方構成：当帰 4.0, 地黄 4.0, 芍薬 3.0, 川芎 3.0, 黄芩 3.0, 山梔子 2.0,  
黄連 2.0, 黄柏 2.0 (『北里東医研処方集』による)

処方の特徴：温清飲は、『外台秘要』の黄連解毒湯と『和剂局方』の四物湯とを合わせた薬方で、両方の処方の意味合いを併せ持っている。温清飲加釣藤黄膏(別名：十物降下湯)は温清飲に釣藤 4.0、黄耆 3.0を加えたもので、大塚恭男経験方である。

本来の使用目標：温清飲は、元来は女性の不正性器出血が長引く場合に用いられた処方である。

漢方的所見：

腹証…特徴的なものはないが、腹力中等度で、上腹部および腹直筋の緊張、抵抗のあるものが多い。時に臍傍に瘀血と思われる抵抗・圧痛を認めることがある。

脈…一定しないが、弱くはない。

臨床応用：現在では、上記に加え皮膚疾患をはじめ各種の慢性疾患に応用されている。

1) 慢性に経過した頑固な皮膚疾患

慢性湿疹、アトピー性皮膚炎、掌蹠膿疱症、蕁麻疹、寒冷蕁麻疹、尋常性乾癬、皮膚掻痒症、面疱、肝斑、黒皮症など

2) 各種出血

子宮出血、痔出血、原因のはっきりしない血尿、鼻出血、喀血など

3) その他

婦人の帯下、口内炎、神経症、高血圧症、血の道症、更年期障害、アレルギー体質改善、ベーチェット病など。

構成生薬の薬能：

黄連解毒湯には、鎮静、止血、および「冷やす」作用があり、どちらかという事実でカッカとするもの、寝つきが悪い、顔が熱い、のぼせるなどの傾向がある例に用いる。

四物湯には、「滋潤」・「温める」・「血を補う」などの作用があるとされる。従って、足が冷えて、皮膚粘膜に乾燥傾向があつてガサガサするものに用いて、血流を改善し、皮膚に潤いを与えるという。

二つの処方を併せた温清飲には、四物湯の温で血行を良くし、黄連解毒湯の清で血熱を冷まし、瘀血を除くということになるが、まったく新しい別の作用も生まれると考えられる。

温清飲は、一貫堂の柴胡清肝湯、荊芥連翹湯、龍胆瀉肝湯の基礎になる処方。一貫堂の説では、臓毒症、瘀血症、解毒症の三大体質の一つである解毒症体質の改善にこれら三方を用いるという。

使用目標(花輪『漢方診療レッスン』)：

黄連解毒湯と四物湯を合方した形である。四物湯は本来産婦人科領域の諸疾患に用いられる処方であるが、漢方的には「温め潤す」作用をもっているといわれる。一方の黄連解毒湯は「清熱」の作用があることから、「内を温め外を清す」の意味で温清飲と名づけられた。四物湯の中の地黄は胃腸障害のないもので病態の遷延化したものに用いられる。本方は皮膚粘膜の疾患によく用いられるが、この場合、皮膚は枯躁し、苔癬状となったものによく、粘膜のびらんや潰瘍のあるものには十全大補湯を考慮する。また、しばしば産婦人科領域の疾患や免疫がらみの種々の疾患に応用される。

以上より、湿疹、アトピー性皮膚炎、諸出血(子宮出血、血尿、眼底出血、脳出血など)、高血圧症、神経症、口内炎などに適用されることが多い。その他、尋常性乾癬、白癜風(白なまず)、ベーチェット病などに用いられることもある。

臨床の眼(花輪『漢方診療レッスン』)：温清飲 糖の口内 魚肝油

◎皮疹がカサカサしている場合は温清飲がよいとするのが一般的であるが、ステロイドで抑えられている場合はたとえ「渋紙様」の皮疹であっても四物湯が入ると増悪するケースがある。温清飲は「内を温め、外の熱を清する」の意であるが、ステロイド外用のために内に熱がこもって外に現れないとでも表現できようか。だから私は温清飲のように見えても黄連解毒湯から始めている。

黄連解毒湯に甘草をいれると、梔子柏皮湯のニュアンスもできるので時に加味している。石膏を10~20g 加えることも多い。石膏は「滋陰・清熱・発表」(山田業廣『椿庭経方弁』)と要約されるという。地黄のようにい貳性(胃にもたれる)がなく、当帰のように温性がないので皮膚疾患の炎症の強い時は使用する機会が多いように思う。

◎皮膚疾患には石膏・黄連などを上手に使うのがポイント

石膏…熱をとり、潤す…皮膚がポロポロした感じ、尿の出はよい

黄連…熱をとり、乾かす…紅皮症・かゆみの基本生薬、尿の出が悪い。

子宮出血の基だしきもの。

◎一皮剥けたような、赤くびらんを伴う、見るからに無残な皮疹には十全大補湯。十全大補湯の皮疹は隆起しないのが特徴である。

◎かゆみの強いもので非常に寒がるものがある。この中には石膏の必要な場合がある。「熱厥」の証である。白虎湯(または白虎加人参湯、白虎加黄連湯)を用いる。

◎消化器症状または心因性の要素のからんだアトピーに、半夏瀉心湯がよいことがある。

◎瘀血兆候、便秘があり、「狂ったように掻き毟る」というものには桃核承気湯がよい。すべて瘀血兆候があれば駆瘀血剤を用いる。桃核承気湯、桂枝茯苓丸、当帰芍薬散から選択する。陳旧性の場合には抵当丸を使用することがある。

□その他の適応

- ・透析中の患者の管理の試み：皮膚のかゆみ…当帰飲子、黄連解毒湯、温清飲
- ・ベーチェット病：黄連解毒湯、温清飲、十全大補湯、甘草瀉心湯、清熱補湯
- ・糖尿病に高血圧を伴うものは四物湯を含む処方考慮する。四物湯は血管壁を丈夫にする作用があるからである。温清飲、温清飲加釣藤4黄耆3(エキスなら七物降下湯と黄連解毒湯を併用)などを用いる。
- ・糖尿病の合併症に対する処方…糖尿病性網膜症…黄連解毒湯で炎症をとり、四物湯で血管の再生を促す。 cf.「明朗飲」…苓桂朮甘湯に車前子・細辛・黄連を加えたもの。眼の炎症、充血、流涙を参考にする；「十全大補湯」…四君子湯+四物湯+桂枝・黄耆。出血の吸収を促進し、血管の再生を促す。
- ・代償性肝硬変：四物湯を基本にした処方…顔色がどす黒いもの、出血傾向のあるもの…温清飲、加味逍遙散料合四物湯…場合によっては駆瘀血剤を併用する。温清飲
- ・潰瘍性大腸炎：内視鏡所見を参考にしての鑑別…炎症がactiveで出血性であれば黄連解毒湯から始め、炎症が収まるにしたがって、温清飲に変更し、inactiveなら十全大補湯としていく。同じく炎症がactiveで出血性であっても、浮腫様で汚く、一部に貧血様で全身状態も疲弊していれば、まず十全大補湯から始め、出血が止まってから、柴胡剤などで全身状態を改善していく。
- ・脳血管障害…リハビリ時期
  - ①出血・梗塞の吸収…温清飲または十全大補湯、②しびれ・麻痺…桂枝茯苓丸、③冷え・麻痺…真武湯、④意欲低下…補中益気湯( cf. ②時期：烏薬順気散や続命湯、小続命湯も考慮 )

radiation colitis

これらほかに、私が好んで使用する処方に黄連解毒湯がある。最近、脳動脈硬化性痙攣に効果があるという報告もあり、注目を集めているが、古くより中枢興奮、出血傾向、ある種の自律神経症状などに使われてきた名処方の一つである。最近、私は七物降下湯に黄連解毒湯を合わせた処方を愛用している。黄柏は両処方に共通しているので新処方では十味からなる。私はこれを十物降下湯と仮称している。

脈。帯下崩中は脈多くは浮動にして、虚遅の者は生き、実数の者は重し。

崩漏(子宮出血)は新久虚実の不同あり。

○初めて起こり湿熱に属する者は、宜しく毒を解すべし。黄連、黄芩、黄柏、生地黄、蒲黄。左を剉みて一劑とし、水煎し、空心に服す。

○婦人血崩を治す。年四十以上、悲哀甚だしければ、則ち心悶えること急に於て、肺葉萎く焦がれて、上焦通ぜず、熱氣中に在り、故に血走りて崩し而して面黄肌瘦す。慎んで燥熱の薬を服すべからず。蓋し血熱流行す、先づ黄連解毒湯を以てし、後に凉膈散を以て四物湯に合し調治して効あり。

◎稍久しく虚熱に属する者は宜しく血を養いて而して火を清くす。

温清飲 婦人経脈住まらず、或は豆汁の如く、五色相雜え、面色萎黄、臍腹刺し痛み、寒熱往来し、崩漏止まらざるを治す。当帰、白芍薬、熟地黄、川芎、黄連、黄芩、黄柏、梔子各一錢半。左を剉み一劑とし、水煎して空心に服す。

◎日久しく虚寒に属する者は宜しく温補すべし。

朝の頭痛

一口に頭痛と言っても、その性状は多様である。この中で最近特に問題となっているのは脳動脈硬化に伴う頭痛で、この場合早朝に起こるのが特徴である。朝まだ寝床に入っているうちに痛み出し、起きてしばらくすると軽快するというものである。こうした現象が日常的になると、この病気を考えねばならない。

私の父は医師であったが、若いころから腎臓の病気があり、それに伴う高血圧に悩まされていた。五十二歳のある朝、左眼の眼底出血を起こし、以後は右眼のみで仕事を続けた。そして八十歳のある朝、強い脳出血を起こして死亡した。朝の頭痛は後半生の父を悩まし続け、いろいろと薬を工夫したが、最終的に四物湯に釣藤、黄耆、黄柏の三味を加えた処方がいとの結論を得たようである。

この新処方後は後に七物降下湯と名づけられ、今ではこの名称が一般に認められている。釣藤はカギズラの釣つきの枝で、リンコフィリンなどの成分があり、鎮静、血圧下降などの作用のあることが確かめられている。

釣藤を含む処方としては釣藤散、抑肝散なども知られている。このうち、釣藤散はやはり脳動脈硬化性頭痛に広く使われている。また父の例で恐縮だが、眼底出血後、数年を経て出血を起こした方の眼が緑内障を起こして猛烈な頭痛に苦しんだ。一時は悪い方の眼の眼球摘出まで考えたが、この時は釣藤散の服用で手術を免れ、遂に再発を見ることができた。

これらほかに、私が好んで使用する処方に黄連解毒湯がある。最近、脳動脈硬化性痙攣に効果があるという報告もあり、注目を集めているが、古くより中枢興奮、出血傾向、ある種の自律神経症状などに使われてきた名処方の一つである。最近、私は七物降下湯に黄連解毒湯を合わせた処方を愛用している。黄柏は両処方に共通しているので新処方では十味からなる。私はこれを十物降下湯と仮称している。

〔1〕校正方輿輓／有持桂里（1758～1835年）

- 1) 温清飲は、婦人が経脈<sup>けいみゃく</sup>住<sup>すま</sup>まず、あるいは豆汁のごとく五色相雜<sup>いしよく</sup>え、面色萎黄、臍腹刺痛、寒熱往来、崩漏やまざるを治す。（『回春』本文）
- 2) 龔廷賢によれば「崩漏には新久虚実の別があり、初起で実熱に属するものは解毒（黄連解毒湯）がよく、やや久しく経過して虚熱に属するものは血を養い火を清するとよく、これには温清飲がよい」という。

〔2〕勿誤薬室方函口訣／浅田宗伯（1815～1894年）

温清飲は「温」と「清」とが相合するところに妙があり、婦人漏下<sup>ろうげ</sup>、あるいは帯下、あるいは男子の下血で久しくやまぬものに用いて験がある。小栗豊後の内室が10余年にわたって下血がやまず、面色萎黄、折れるがごとく腰痛し、両脚に微腫があつて衆医は手を束ねたが、私が温清飲を与えると全癒した。

〔3〕橘窓書影／浅田宗伯（1815～1894年）

- 1) (前略) 下血が久しくやまず虚憊するものは六君子湯加炮姜を用い、傷寒で下血虚脱のものは黄土湯<sup>にわかつ</sup>を用いる。暴<sup>にわか</sup>に下血するものにもこれを用い、痔血には白頭翁加甘草阿膠湯<sup>びやくとうおうかかんそうあせうとう</sup>を用いる。また湿熱の多いものには温清飲を用い、過洒下血のものには三黄湯<sup>さんわうとう</sup>加紅花を用いる。
- 2) 私は老人の頑癬を数十人治したが、そのうち痒痛が甚だしく熱のないものは当帰飲子あるいは十全大補湯加荊芥を用い、血燥が甚だしく熱があるものには温清飲を用い、水気があつて実するものは東洋赤小豆湯<sup>とうやうせくせうとう</sup>を用い、虚するものは濟生赤小豆湯<sup>せいせいせくせうとう</sup>加附子および真武湯加反鼻を用いて多く効を奏した。

〔4〕先哲医話／浅田宗伯（1815～1894年）

- 1) 老人の頑癬は、多くは血液が乾燥し、温熱が肌表を薰ずることによるもので、温清飲が適治である。あるいは浮萍を加えてもよい。
- 2) 微毒が上攻し、頭上<sup>かぶ</sup>が腫起して凸凹をなすものは火証に属し、温清飲がよい。微毒が火を生じて動かすので、徒<sup>いなずら</sup>に湿として治してはならない。  
(和田東郭)

〔5〕方読便覧／浅田宗伯（1815～1894年）

本朝経験に田虫を治する方がある。すなわち温清飲に土茯苓、大黃を加えたものである。

〔6〕雑病翼方／浅田宗伯（1815～1894年）

『寿世』解毒四物湯は大便秘下血を治し、糞便糞後を問わずに用いる。この方は温清飲に地榆、槐花、阿膠、側柏葉を加えたものである。『名医方考』に「上下失血<sup>しつちけつ</sup>太<sup>はなは</sup>だ多ければ則ち必ず四物湯を与うる勿れ」とあり、瘀血、癘毒<sup>れんとく</sup>のごときに対してもこれを禁じている。そこで四物湯に黄連解毒湯を合方したもので、温清飲は適宜な処方である。

治験

〔7〕橘窓書影／浅田宗伯（1815～1894年）

- 1) ある男子が治を求め、診ると全身の肌膚が甲錯<sup>かさく</sup>して魚鱗のごとくなり、小腹拘急、脈数、消食善饑、氣逆暴怒して自らを制することができない。世医は背腎虚として滋補の剤の八味丸などを投じたが、氣逆がますます甚だしく、肌膚の甲錯は常に倍した。私は、この患者は性急で、肝火が血を克<sup>く</sup>しており、そのために肌膚が榮<sup>か</sup>することができないのであり、まずその火を疎<sup>そ</sup>して血を潤すべしと考え、黄連解毒湯に四物湯を合して(温清飲)与え、服すること数旬で漸次諸症が治まった。
- 2) 30歳ばかりになる内室が下血を患うこと数年、数人の医師が治療したが治らず、面色萎黄、皮膚甲錯、手足が癩<sup>か</sup>（皸）をなし、足脛浮腫、爪色は榮<sup>か</sup>えず、腹が微満し、経水期に先だつて必ず腰痛下血する。私が六君子湯加厚朴、香附子、黄連を与え鉄砂丸<sup>てつさだん</sup>を兼用すると、服すること数旬で下血はやみ、浮腫は去り、腹は堅実となった。しかし皮膚甲錯は故のごとく、時に肛門が焮痛<sup>えんどう</sup>する。私は血熱の所為と判断して温清飲を与え、肛門に紫雲膏を貼すると、およそ1年あまりで全身に血沢を生じ、諸証は全癒、やがて懐妊して一女子を挙げた。
- 3) ある妻女が産後の下血が久しくやまず、肛門が疼痛して日夜耐えがたく、顔色青惨、短氣<sup>たんき</sup>にして微熱があり、脈は浮数で力がない。私は「腸中の湿熱が内痔を醸<sup>か</sup>し、血管が逆裂<sup>ぎやくれつ</sup>する故に苦痛があるのであり、真の下血ではない」と診断し、白頭翁加甘草阿膠湯を与え、蠟蟬丸<sup>ろうせんがん</sup>を兼用すると疼痛は大い減じ、下血もこれにしたがつてやんだ。そのあと疼痛はなく、ときどき下血したので温清飲を与えて全治した。



■橘窓書影

〔8〕井見集 附録／山田業精（1850～1907年）

40余歳の妻女が痔疾に罹り、大いに脱肛して収まらず、痛みが激しく転側することもできず、日夜眠ることなくただ号泣するのみで、二便は通ぜず食思もない。よって温清飲を投じ、かつ患部へは蒲黄、辰砂、竜腦を蜜で練ってこれを貼ると、次日に出血して痛みは大いに減じ、3～4日を経て全治した。

また、ある男が常に酒を嗜み1日として飲まぬことはなく、加うるに壮年のころ大いに微毒を患ったことがあるという。ある日痔疾に苦しみ、その症候は上記の例とまったく変らない。よって前方、前付薬<sup>まへつけりやく</sup>を投ずると患部から大いに出血し、5～6日を経て全治した。

5. 古典

本方については先人の口訣は極めて少ない。

(1) 有持桂里・『校正方輿輓』

「廷賢曰く、崩漏<sup>ほうろう</sup>の者、新久虚実の同じからざるものあるなり。初起、寒熱に属する者は解毒に宜しき也。稍久くして虚熱に属する者は、よろしく血を養い、火を清すべきなり。温清飲に宜しと。此の條前に挙げし所の、子和の黄連解毒の論と参観すべし。蓋し子和は其の病新にして盛んなる者を論じ、廷賢は久にして衰る者を説く、各一説なり。」（集成85巻、p.141）

(2) 浅田宗伯・『勿誤薬室方函口訣』

「此方は温と清と相合する處に妙ありて、婦人漏下<sup>ろうげ</sup>或は帯下或は男子下血久不止者に用いて験あり。小栗豊後の室、下血不止十余年、面色萎黄、腰痛如折、両脚微腫ありて衆医手を束ね。余此方を与えて全癒。」（集成96巻、p.155）

(3) 香月牛山・『牛山方考』・黄連解毒湯

「婦人崩漏<sup>ほうろう</sup>の症、血下る度、湧<sup>わく</sup>が如く、身熱甚く、口渴して謔語するに、四物湯を合し、煎湯にて棕櫚灰を用いて奇効あり。（略）

婦人赤白帶壯盛に属し、寒熱往来し、或は帯下によりて頭面に熱瘡を生ずるあり。（黄連解毒湯に）四物湯を合して連翹、白芷、藜朮を加えて奇効あり。」（集成61巻、p.63&64）